

山名宗全邸跡

[東陣]

山名一族を率いた山名持豊（1404～1473 年）は、1336 年から 1573 年まで日本を支配した武士主導政権の足利幕府内で、人生の大半にわたり大きな影響力を振るった位の高い大名でした。持豊は仏僧になった後、「宗全」と名乗りました。しかし出家したにもかかわらず、持豊が政治への関心を弱めることはありませんでした。

1467 年、将軍の跡継ぎなどの問題を巡る宗全と義理の息子・細川勝元（1430～1473 年）との間の確執が、「応仁の乱」として知られる紛争を引き起こしました。この 10 年に及ぶ内戦は京都を荒廃させ、日本各地に広がりました。戦は幕府を大きく弱体化させ、長い不安定な時代が始まるきっかけとなりました。

宗全は主に、応仁の乱の最中に京都の西側を支配した派閥のリーダーとして名を残しています。彼は応仁の乱の終結を見ることなく亡くなりました。宗全の支配下にあった地域は後に、西陣（「西側の陣地」）として知られるようになりました。この地区の中心部に宗全の邸宅がありましたが、今では石碑によってのみその跡地を識別できます。